前回までのあらすじ

流遠（るとお）やみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる――そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅（せんめつ）であり、彼女はそのための存在――〈機獣（きじゅう）少女〉だった。

やみひめの前に現れたツバキは、彼女達を襲ってきた〈カタストロ〉との戦闘に突入するが、本調子でないツバキは苦戦を余儀なくされてしまう。このままでは二人とも助からない――そう判断したツバキは、やみひめを逃がすため、〈カタストロ〉と刺し違える覚悟を決める。

しかし、それをよしとしないやみひめはツバキに、自分が〈機獣少女〉になると提案する。

〈機獣少女〉への変身を成し遂げたやみひめは、辛くも〈カタストロ〉の撃退に成功するも、殲滅には至らなかった。そこで、やみひめはツバキに協力の継続を申し入れ、彼女を家に招く事にした。

ツバキや、彼女のパートナーであるＭＢデバイス〈カグツチ〉との交流を深める事で、やみひめは様々な事を知っていく。

慌ただしかった週末が終わると、新たな一週間が始まる。

再開する日常。友達との再会。

一見、何も変わっていない平穏な日々。

だが、どこかに〈カタストロ〉という災厄が潜んでいる。

〈機獣少女〉と〈カタストロ〉の戦い。それは、やみひめとは関係のない別の星の出来事で、本来であれば知るはずのない戦い。

だが、彼女は知ってしまった。もう、関わってしまった。

だから――

登場人物

◆流遠（るとお）やみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂（たかちほ）ツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるＭＢデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘（たちばな）アサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウ・Ｐ・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れした大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲（かみじょう）ハン

やみひめとクラウのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX

夜の九時ともなると、用もなく公園を訪れる者もいなくなる。ここはデートスポットではないし、ランニングのコースに適しているとも言えない。何より、夏に痴漢による暴行未遂事件が起きた事もあり、夜中に近寄る者はまずいない。

だが、そんな場所にも関わらず、そこには二人の少女の姿があった。

一方は長い黒髪をポニーテールにした快活そうな少女だ。琥珀のような明るい橙色の瞳は吊り目がちだが、攻撃的な印象はない。狼の気高さと、獲物を追い込む狩猟犬の従順さを併せ持っているイメージとでも言えばいいだろうか。

流遠やみひめ。

地元の小学校六年三組に在籍する、ごく普通の少女である。

しかし彼女は今、普通の小学六年生の女の子の格好をしていなかった。彼女が身に付けているのは和服だ。正確に言うなら、和服とミニスカートを組み合わせたような、アニメの変身ヒロインが着ていそうな衣装である。通行人が見かければ『……コスプレ？』と生温かい視線を一瞬だけ向け、すぐに逸らしただろう。

「……」

だが、やみひめの表情は真剣だった。

当然だ。彼女の衣装は仮装の類ではなく、〈機獣少女〉の戦装束であるMBジャケットである。そして、やみひめが人気のない夜の公園にいるのにも理由がある。

「そうです。その調子で心を落ち着けて、でも、内圧は高めていくようなイメージで」

瞳を閉じ、瞑想するように立ち尽くすやみひめに向かってそう言ったのは、もう一人の少女だった。

セミロングの黒髪を左側でサイドテールにした、おとなしそうな少女である。蒼玉のような澄んだ青い瞳は、表情と同じ穏やかな色を湛えている。おとなしそうと言っても、気弱な感じはなく、大人びている印象だ。

ツバキ・タカチホ。

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉である。学年で言うとやみひめより一つ下の小学五年生に相当する。地球の大気組成による影響か、ツバキは現在、〈機獣少女〉として十全に力を発揮出来る状態にない。そこで代わりに〈機獣少女〉となったのが、やみひめだった。ツバキと同じく地球にやってきた敵性体である〈カタストロ〉を殲滅するために。

「ツバキ……落ち着けて、でも高めろって、矛盾してない？」

瞳を開いたやみひめが、苦手科目のテスト問題を見るような顔をした。

「矛盾するようですが、それが戦士の在り方です。心は冷静に、しかし闘争心は熱く――といった具合に」

『戦士』という単語が似つかわしくないはずのツバキの言葉に、不思議と説得力があるのは、やはり〈機獣少女〉として戦ってきた自負があるからだろう。やみひめもそれを感じたのか、再び瞳を閉じ、精神統一を再開する。

彼女がやっているのは、『機力』のコントロールだ。機力とは〈機獣少女〉の力の源で、MBジャケットの生成・維持を行うためのエネルギーでもある。ツバキの住む惑星ゼヘナでも、〈機獣少女システム〉が生まれるまで存在を知られていなかった力で、現在では生物が持つ『気』の一種として認知されている。ちなみに、総量は圧倒的に女性が多く、男性の機力量では〈機獣少女システム〉を稼働させる事が出来ない。特に十代の女性――すなわち、『少女』と呼ばれる歳頃が機力のピークとされており、それが〈機獣少女〉の名前の由来でもある。

「呼吸をするように、大気中の機素を取り込んで、体内のMBコアで機力に変換するんです」

「『機素』？」

ツバキのアドバイスの中に聞き慣れない単語があり、やみひめが聞き返す。

「酸素や二酸化炭素と同じ、元素の一種です。認識されていないようですが、地球にもありますよ」

「MBコアっていうのが、『仮想器官』？　としてあるっていうのは聞いたけど、どうやればいいの？」

「考える必要はありません。やみひめさんは〈機獣少女〉ですから、方法は識っているはずです。やみひめさんは呼吸の仕方を誰かに教わりましたか？」

「教わってないけど……」

「そういう事です。実際、先日の〈カタストロ〉との戦闘の際には出来ていましたよ」

ツバキの説明には具体性がない。物事を理詰めで考える彼女がこういう説明をするという事は、具体性のある説明は不可能という事かもしれない。だから、やみひめは考えるのをやめ、感覚的に機力のコントロールを試みた。

すると――

「お見事です」

ツバキが微笑を浮かべて賛辞の言葉を述べた。やみひめの纏うMBジャケットに、薄っすらと紅い燐光が生まれている。

「……なんか、出来ちゃった」

「それが機力運用です。言ったでしょう？　方法は識っていると」

あっけなく成功してしまった事にぽかんとしているやみひめに、ツバキは当然の結果だ

という顔をした。

「では、少し体力を使いますが、気力の放出をしてみましょう。まだ慣れていないでしょうから、やりすぎないように気を付けてください」

「うん、やってみる」

少し緊張気味に、やみひめが機力（きりょく）のコントロールを再開する。傍目（はため）には、やみひめはただ立っているだけに見えるが、同じ〈機獣少女〉であるツバキには機力の流れが視（み）えていた。やみひめの身体（からだ）から発生した紅（あか）い燐光（りんこう）――それが周囲に放出されている。

やみひめが行っているのは気力のコントロールだが、その目的は〈カタストロ〉を呼び寄せる事にある。

〈ジェネレーター〉を狙って現れる以上の情報がないため、〈カタストロ〉に対しては専守防衛が定石（セオリー）だ。しかし、ここ地球には〈ジェネレーター〉が存在しない。なので、同じＭＢコアを持つ〈カグツチ〉を狙って現れるかもしれないという仮説に至ったはいいが、それもまた、『待ち』の姿勢である事に変わりはない。

いつ現れるか判らない敵を待つというのは、精神的に非常にストレスだ。常に緊張状態に置かれ、やがて緊張の糸は切れるか、もしくは心が擦（す）り減ってしまう。最悪なのは学校で襲われる事だろう。周囲への被害もそうだが、衆人環視の中で〈機獣少女〉に変身すれば、やみひめの今後の生活に支障をきたす恐れがある。

そこで、やみひめが発案したのがこれである。判りやすいサインを出して『ここにいるぞ』とアピールする。相手を誘い、自分に有利な状況で戦うために。

その発想にツバキは呆（あき）れたが、現状で採（と）れる最善の策でもあると判断し、機力の放出を提案した。場所が夜の公園なのも、人目に付かず、周囲への被害も少なくて済むという判断からだった。

「やみひめさん、そのくらいで充分だと思います」

時間にすれば三分ほどだろう。機力の放出を行うやみひめに、ツバキはストップをかけた。

「……ふう。〈カタストロ〉、気付くかな？」

「この街に潜伏しているなら、気付かないはずはありません。ただ、〈カグツチ〉のＭＢコアを標的にするというのは仮説でしかありません。気付いても無視される可能性はあります」

「それならそれで、おとなしくしててくれる事にならない……かな？」

自分でも楽観的な考えだと理解はしているのだろう。それでも、やみひめの表情からは、『望み薄だろうけど、可能性くらいはあるのでは？』という淡い期待が窺（うかが）える。

「戦わずに済むなら、それが最善でしょう。ですが、自分の住む街に猛獣が息を潜めていると知っていて、やみひめさんは心穏やかに暮らせますか？」

「……無理、だよね」

〈カタストロ〉の脅威を身をもって知っているからだろう。ツバキの言葉には、現実を知るからこその重みがある。甘い言葉が聞きたかった訳ではない。だが、やみひめは心のどこかで、ツバキが自分の言葉を肯定してくれるかもしれないという期待があった。

「悲しい事ですが、自分達を護るために他の何かを犠牲にするのは、生物が生きる上で仕方がない事です。人間同士でも利害の不一致が起きれば争いになります。ましてコミュニケーションが成立せず、自分達の生存権を脅かす相手であれば、共存共生は不可能です。だとするなら――」

戦うしかない。

相手を殲滅するまで。

「……うん」

判っている。そうやって人間も生きてきた。集落同士の争いから国がまとまり、やがて外国とも戦い同盟関係や連合体に発展していった。争いは必ずしも悪ではない。

そして、争いは未だになくならない。いつかは『地球』という規模で人類がまとまる日が来るかもしれないが、それで争いがなくなるとは思えない。平和で豊かと言われている日本ですら、いじめや差別がなくならないのだから。

こんな言い方は不謹慎かもしれないが、〈カタストロ〉という天敵がいるゼヘナは、人間同士で戦争をしている地球より救いがあるかもしれない。相手はコミュニケーションが不可能な怪物だから。倒すしかないから。

そこまで考えて、やみひめは自分の考え違いに気付いた。自分はそんな風に割りきれなかった。だから〈カグツチ〉に身体を貸して、代わりに戦ってもらったのではないか。

〈カタストロ〉も生き物だ。確かに生きていると感じた。それを殺す事に抵抗がないはずがない。自分達が生き残るためだから割りきれというのは、一方的な理屈でしかない。

「……すみません、やみひめさん」

沈思黙考していたやみひめの耳に、そんなツバキの言葉が届いた。彼女はいつもの澄まし顔を引っ込め、見ている方が痛ましい気持ちになるほどに申し訳なさそうな顔をしている。

「ツバキ……？」

「判ってはいるんです。私の言っている事は一方的な理屈だと。それを押し付けても、やみひめさんが納得なんて出来ない事も」

ツバキの言葉の一つ一つに、やみひめは『痛み』を感じた。言葉と共に、血を吐いているような、ツバキの心の痛みを。

「でも、私には別の言い方が出来ません。私はそうやって自分を納得させてきましたから」

それはツバキが、そういう生き方をしてきたという事だろう。だがそれは小学五年生の処世術というには、あまりにも歪（いびつ）だ。

●
●
●

「……やはり、貴女（あなた）を巻き込むべきではありませんでした」

やみひめとツバキでは育ってきた環境が違う。争いのない平和な国――少なくとも表向きは――で生まれ育った、それが普通の少女に、〈機獣少女〉の代行など託すべきではなかった。当面の危機を乗り切った時、やみひめの申し出を断るべきだった。やみひめと心を通わせ、彼女をより知った事で、ツバキはその想いを強くしていた。

世の中には知らなくていい事がある。知らない方がいい事がある。

たとえ愚か者と言われようが、知らない事で幸せに生きられるなら、愚か者でいいと思う。

現実は過酷で。

真実は残酷だから。

知らないままでいた方が幸せに生きられる。

臆病者の方が長生き出来る。

それは悪い事ではない。

それはツバキが誰よりも知っている。

なのに、ツバキはやみひめから愚かである権利を奪ってしまった。

いつまでも知らずにはいられない。いつかは知ってしまう。

だが、それはもっと先でいいはずなのだ。

ゆっくりと。少しずつ。受け止められる心の強さを育ててからで。

そうでないと、自分のようになってしまうから。

自分を救ってくれた恩人には――やみひめには、そうなってほしくない。

優しいまま、幸せに生きてほしいから。

「……ツバキ、あのね――」

「今夜はこれで帰りましょう」

やみひめの言葉を遮（さえぎ）り、ツバキは言った。

「機力（きりょく）を放出して、だいぶ経ちました。今夜は現れないでしょう。あまり遅いと、ご両親に心配をかけてしまいます」

やみひめの両親にはランニングだと言ってある。無論、小学生の女の子だけで夜に外出をさせるはずがないので、少しだけ暗示を併用して判断力を低下させてあるが、それでも帰りが遅くなれば不安になるだろう。

だが、それはツバキの方便だ。

やみひめの表情には困惑がはっきりと浮かんでいた。

これ以上、彼女を困らせたくない。

これ以上、負担をかけたくない。

それは、やみひめのためもあるが、それ以上に、ツバキ自身が罪悪感で潰れそうだったからだ。

「だから、帰りましょう――ね？」

「……うん、そうだね」

そう答えた時のやみひめの笑顔は、明らかに無理をしていた。

第八話

『機獣少女と相手の気持ち』

「……ふぁ」

朝の通学路を、欠伸を噛みしめながら歩く。誰に見咎められる訳じゃないけど、口元を隠すくらいの慎みはある。女の子だし。

火曜日の朝っていうのは新鮮味がない。月曜日は休み明けだから、少しは緊張感みたいなのがあるけど、二日目はもう通常運転。

でも、欠伸が出るのは新鮮味がどうとかじゃなくて、あまり眠れなかったから。昨日から、夜に〈カタストロ〉対策を始めた。その時に、ツバキとちょっと気まずい空気になってしまい、そのままベッドに入ったせいで、よく眠れなかった。

今朝もツバキと上手く話せなかった。今日も図書館に行くって言ってたから、私が学校に行ってる間の心配はないけど。そもそも、ツバキはいつも通りに見えたから、私が一方的に気まずく思ってるだけかもしれない。

「……駄目だなぁ。私の方が年上だし、ツバキは別の星から来て心細いはずだから、私がしっかりしないといけないのに」

自分に言い聞かせるために、つい声に出してしまった。

いけない。こんな顔してたら、くらうにも心配されちゃうよね。くらうは普段はぼんやりしてるけど、実はすごく鋭いから。

「あれ……？」

表情を引き締めて臨戦態勢をとっていたのに、いつもの場所にくらうの姿がない。別に待ち合わせをしている訳じゃないから、ここで顔を会わせない日もある。けど、それは私が寝坊したり、くらうが学校を休んだりした時くらいで、ほぼ毎日、ここで会って一緒に登校している。

「遅刻……は、くらうはしないから、お休みかな？」

十分くらい待っても、くらうは来なかった。昨日、別れた時は普通だったと思うけど。

これ以上こうしていると遅刻してしまうので、私は仕方なく一人で学校に向かった。

私がくらうが欠席だと知ったのは、朝のホームルームの時だった。担任の神譲先生に詳しく訊くと、体調不良だと教えられた。季節の変わり目だから、そういう子は珍しくないし、病気じゃないらしいから、お見舞いに行ったりして大事にしない方がいいよね。明日には元気になって登校してくるかもしれないし。

くらうには悪いけど、今日は会っても心配をかけちゃうかもしれなかったから、そういう意味では不幸中の幸い……だったのかな。

●●●

その日の学校はつつがなく終わった。友達は他にもいるけど、くらうがいないのは、やっぱり物足りない。

休みでよかったなんて、少しでも思ってごめんね。

くらうに対して、そんな小さな罪悪感を感じながら、放課後はいつものように公園に立ち寄る。

〈機獣少女〉になっても、ツバキと気まずくなっても、これだけは変わらない。変えたくない。

これが私の日常だから。

アサトが私にとっての日常の象徴だから。

「ア～サ～ト♪」

今日も気怠(けだる)い雰囲気全開でいつものベンチに座っていた男の子に声をかける。少し長めの黒髪と、同じく黒い瞳で、黙ってればちょっとは格好良く見えなくもない。

「……気持ち悪いぞ、やみ子」

開口一番に失礼な事を言われた。確かに今のは私のキャラにないし、何事かと思われても無理はないけど……気持ち悪いはないと思う。

「失礼だよ、アサト！　精一杯、可愛く言ってみたのに！」

この失礼な男の子が橘(たちばな)アサト。高校三年生。

自分でも不思議に思う時があるけど――私の好きな人。

「わざとらしいんだよ。あざとい以前に、無理してる感がアリアリだ。痛々しいぞ」

「……そんなに駄目だった？」

「五段階評価なら一だな」

「う―……」

ひどい。辛口すぎる。

だいたい、どうすれば男の子が可愛いと思ってくれるか判らない。特にアサトは普通のやり方じゃ無理っぽいし。

そういえば、アサトの女の子の好みとかも知らない。

あれ？　そもそも、アサトって本当に彼女とかいないのかな？　前に、飼ってる猫を『彼女』とか紛らわしい言い方してたけど、本当にいないとは言ってないし……。

「――何かあったのか？」

「ふぇっ！？」

慌ててしまい、変な声が出てしまった。

「……なに焦ってんだ？」

「べ、別に！？　全然、焦ってないよ！？」

駄目だ。これじゃ完全に挙動不審だよ……。

ど、どうしよう。よし、まずは当たり障りのない話題で態勢を立て直そう！

えっと……嗚呼、何も浮かばない。

「……昨日は悪かったな」

私がテンパっていると、ふいにアサトが呟くみたいに言った。

何の事を言われてるのか判らず、アサトの方を向くと、私から微妙に視線を逸らして目を合わせようとしない。

「何の事？」

少し考えても判らなかったので、私は疑問をそのまま口にした。

「なんだ。キスするふりをして、からかったのを怒ってたんじゃないのか？」

アサトが『違うのか？』みたいな顔をしてる。

昨日の放課後もアサトに逢って、その時に私が無防備な事に危機感を持たせようとして、キスするふりをされた。私は本当にされると思ってドキドキしたけど、からかわれたって判って怒ってしまった。

そういえばツバキに、『悪かったなと伝えてくれ』と伝言をしてくれていた。

もう怒ってなかったけど、直接言ってくれて、ちょっと嬉しい。

「もう怒ってないよ。私のためにしてくれたんでしょ？」

ツバキにも言われたし、冷静になれば判る事だった。

「私の方こそ、ごめんなさい。昨日は態度、悪かったよね」

伝えたい事は伝えられるうちに――これもツバキに言われた。

本当に、ツバキの方がお姉さんみたいだ。

「最初に言うつもりだったけど、恥ずかしくなって。それで……」

「それで気持ち悪い猫なで声になってたのか」

また気持ち悪いって言われた。図星だから反論出来ないけど……。

「そうだよ！　気持ち悪くてごめんなさいでしたー！」

やっぱり意地悪だ。アサトがこういう態度なのも、私が怒る原因だと思う。

「――え？」

私が不貞腐れていると、ふいに頭に手を載せられた。少しぎこちなくだけど、そのままゆっくり撫(な)でられた。

なんだろう、すごく落ち着く……。

「ふみゅ～」

思わず感嘆の声が漏れ出てしまった。

「……お前、やっぱり猫みたいだな」

「前にも思ったけど、アサトって撫でるの上手いよね。飼ってる猫にもしてるんでしょ？」

前に見せてもらった猫の待ち受け画像を思い出す。たしか茶色の日本猫だった。

「ああ、ベアトリーチェか。そういや、前に画像を見せたな」

「うん、すごく可愛かった。ベアトリーチェっていうんだ」

「他にもあるぞ」

「うわぁ、可愛い……！？」

鞄から携帯電話を取り出して、アサトが画像を見せてくれる。ベアトリーチェの画像も可愛かったけど、その時のアサトが珍しく楽しそうで、そっちの方が気になってしまった。

でも、指摘しようとしてやめた。言ったら、もう画像を見せてくれなくなるかもしれないから。

しばらくベアトリーチェの画像を見ていて、すっかり和(なご)んでしまった。上手い具合にアサトに誤魔化された気もするけど、別にいい。単純かもしれないけど。

「……ねえ。アサトはツバキの気持ち、判る？」

普段通りの空気になったのを機に、私はアサトにそんな事を訊(き)いた。

「唐突だな。なんで急にそんな話になる？」

「日曜日の帰りのバスで思ったの。アサトとツバキって、似てるのかなって」

日曜日にツバキの身の周りのものを買うために街に行って、その時に、アサトにも一緒に来てもらった。その時の帰りのバス内でのツバキの言葉は、はっきり覚えている。

――『橘(たちばな)さんは私と同じ側の人間ですね』

あの言葉をツバキがどういう意味で言ったのかは判らない。でも、同じなら、考える事も同じかもしれない。

「だから、アサトならツバキの気持ちが判るのかなって」

私には判らない。

判らないから、ツバキになんて言っていいかも判らない。

「――判る訳ないだろ」

私の耳に届いたアサトの答えは、それだった。

「俺はツバキじゃないから、あの子の気持ちなんて判らない。どんなに似てたって、違う人間だ。同じはずがない。だから、俺にツバキの気持ちは判らない」

「……そっか。そうだよね」

こんな当たり前の事に気付かなかった――ううん、気付いてたけど、気付いてないふりをしてたんだ。もしかしたらって期待して。

「何かあったのは、ツバキとの方だったのか？」

「……うん」

「さっさと謝れ。ひたすら平身低頭の土下座スタイルでな」

「……ちょっと、なんで私が悪いの前提なの？」

「違うのか？」

私がジトッとした視線を向けると、アサトは心底、意外そうな顔をした。アサトの私に対する認識は改めさせる必要があると思う。

「別に喧嘩（けんか）した訳じゃないの。ただ、ちょっと気まずくなってるだけで……」

「お前が原因なんだろ？」

違う――って言いたかったけど、そうなのかな。私にツバキの気持ちが判れば、気まずくならずに済んだかもしれない。だとしたら、やっぱり悪いのは私かもしれない。

「……」

「……判った。ちゃんと聞くから、そんな顔するな」

珍しくアサトが困った顔をしてる。私、そんなにひどい顔してたのかな。

「あのね――」

昨日の夜の事を、〈機獣少女〉に関する事はぼかして話した。ツバキと一緒にやらなきゃいけない事があって、そのためには衝突する相手に勝たなきゃいけない。仕方がない事だって頭では理解出来（でき）るけど、私はそう割りきれない。

「元々はツバキがやってた事で、それをお前が手伝ってるんだろ？　どういう経緯でそうなったかは知らんが、嫌ならやめればいいんじゃないか？」

「それは却下」

「だったら、お前が割りきるしかない。強制されてるならまだしも、お前の意思で手伝ってるなら、悩むのはお門違いだ」

「……うん」

それを言われると返す言葉がない。

けど、私が悩んでるのは、実はそこじゃない。

「いざとなったら、割りきる覚悟はしてるんだ。私が気になってるのは……ツバキの事」

他人任せになるけど、〈カタストロ〉と戦闘になった時は〈カグツチ〉に代わってもらう。だから、そこは心配してなかったりする。

「ん？」

「ツバキがね、相手を倒すのは仕方がない事だって言ったの。理解は出来るし、ツバキが冷たいとか非難してる訳じゃなくて、そういう風に割りきれちゃうのって、なんか怖くて……」

「まあ、確かにな。あの子、お前の一個下なんだろ？　それであの精神性は異常だ。たかが半日、一緒に過ごしただけの俺でも、そう思う」

やっぱり、アサトもそう思うんだ。そうだよね。くらうもしっかりしてて、大人っぽいけど、子供らしいところもたくさんあって、見た目は別だけど、同い年だって思える。

でも、ツバキは違う。出会ってまだ日は浅いけど、私とは決定的に違うのが判る。

「詳しい事は話せないけど、ツバキはすごく特殊な環境にいたの。私も、ちゃんと全部を知ってる訳じゃないけど……きっと、私には想像も出来ないような生き方をしてきたんだと思う」

ツバキの生い立ちも、家族の事も、ゼヘナでの人間関係も、何も知らない。

「私、どうすればいいのかな。どうすれば、ツバキの気持ちになれるのかな。どうすれば、ツバキの助けになれるのかな……」

判らないよ。

判らないのは……怖いよ。

「――言ったろ？　判る訳ないって」

「え……？」

「他人の気持ちなんて、判らない方が普通だ。どんなに考え方が似てても、似たような経験があっても、同じじゃない。結局、自分に照らし合わせて、想像するしかない」

「……」

「俺に言わせれば、『気持ちは判る』なんて言う奴の気がしれん。他人の気持ちなんて、判るはずがないんだからな。そんなのは安いっぽい同情か、判った気になってるだけだ。

胡散臭(うさんくさ)い」

アサトの言ってる事は、その通りだと思う。

思う、けど……

「アサトが言うと人間不信みたい」

「てい」

「痛(いた)！？　もう、何するの？」

脳天に軽く手刀(チョップ)をされた。反射的に痛いって言っちゃったけど、実際にはそうでもなかった。

「今まさに、お前は俺の気持ちが判ってなかった。その痛みは、傷付いた俺の心の痛みだ」

よかった。だったら、大した痛みじゃない。

「とにかくだ――他人の気持ちなんて判らないのが普通なんだ。判りたいなら訊(き)け。ツバキの助けになりたいなら、そうして一緒に悩んでやれ。ツバキが悩んでるなら、だけどな。俺にはそれくらいしか言えん」

「一緒に悩むだけで、本当にいいのかな？」

「一緒に悩んでくれる相手がいるだけで、多少は気が楽になるだろ。解決出来(でき)るなら、それに越した事はないけどな」

ツバキの悩んでる事……というより、抱えてるものが、どのくらいの重さか判らない。

私に抱えられるの？

それ以前に、一緒に抱えさせてくれるのかな。

迷惑だって、余計なお世話だって、思われないかな……。

「訊(き)いても、教えてくれないかもしれない」

「そうなったらもう、お手上げだな。特にツバキは、他人を頼ったり、期待したりしないタイプだろうし」

「うー……」

恨みがましい視線をアサトに送る。お手上げじゃ困る。

「だから、そんな目で見るな……良い事を教えてやる」

アサトは渋々といった顔をして、少し間を置いて続ける。

「ああいう『私は独りでも平気ですよ？』って顔してる奴ほど、本当は構ってほしいんだよ。多分、ツバキもな。だから、お節介とか考えずに、図々しくいけ。無神経なくらいにな」

「……それって、嫌われない？」

「お前、俺と会ってる時に、少しでもそんな事、考えてるか？」

……あれ？　それって、アサトに対して私が図々しいって事？

「ねえ、まさかとは思うけど……私って図々しかった？」

「気付いてなかったのか？」

「……私って無神経だった？」

「俺のガラスのハートは、毎日のように傷付いてたぞ？」

……知らなかった。

そっか、私ってアサトにそう思われてたんだ。

「まあ、今のは七割ぐらい大袈裟（おおげさ）だとして」

「三割は本気なの！？」

でも、三割くらいなら心当たりがある気がする。アサトって遠慮しなくていいから、色々と好き勝手に言えるから、無自覚に失礼な事を言ってたかも……。

「マジでへこむな。そうじゃなくて……俺はそれなりに、お前とこうして話してると、気晴らしになるって言ってるんだ」

「え……？」

きょとんとした顔でアサトの方を見ると、目を逸（そ）らされてた。

アサトの先（さっき）の言葉を思い返す。

――『ああいう『私は独りでも平気ですよ？』って顔してる奴ほど、本当は構ってほしいんだよ』

それって、アサトもそうだって事なのかな？

「……アサトは私と会うの、迷惑じゃない？」

「俺は迷惑なら迷惑だって顔をするタイプだ」

「私に構われて、嬉しい？」

「……そういう言われ方をすると、俺が可哀そうな奴みたいだろ」

「答えて」

「……」

「お願い」

ジトッとした視線を向けるアサトに、私は真剣な顔で返す。

アサトの気持ちが知りたいから。

「あー……そうだよ。俺は小学生に構ってもらって喜んでる可哀そうな奴だよ。かまってちゃんだよ。笑わば笑え」

根負けしたのか、開き直ったのか、アサトは少し自虐的にそう言った。
別に可哀そうなんて思わないし、笑わないのに。
むしろ……嬉しい。
「ありがとう、アサト。私、なんか自信が出てきた」
ツバキとアサトは同じじゃないかもしれない。
でも、やっぱり似てると思う。
だったら、アサトと話す時みたいな感じでいけば、ツバキとも上手くやれるかもしれない。
だって――アサトは私の事を迷惑じゃないって言ってくれたから。
「……言っとくが、駄目でも俺は責任取れないからな」
アサトは憮然とした顔でそんな事を言うけど、今のは責任回避とかじゃなくて、照れ隠しに見えた。ちょっと可愛い。
「アサトのせいになんてしないよ。でも、駄目だった時は慰めてくれる？」
本気で言った訳じゃない。駄目だった時の事なんて、考えるべきじゃないから。
これはただの軽口。
「まあ、頭を撫でるくらいはしてやる」
アサトも判ってるから、そんな風に返してくれた。
こういうの、なんか良いな。
アサトはダメ人間で意地悪だけど、それでも好きな理由が今日、少しだけ判った気がした。

●
●
●

陽が暮れてくるとタイムアップ。アサトとの逢瀬は終わりで、それぞれの家に帰らきゃいけない。
すると、いつもの家路の途中で、急に『声』が聞こえた。
（――やみひめ、聞こえるか？）
それはスピーカーを通したみたいな機械音声。突然だから驚いたけど、これは〈カグツチ〉の声だ。〈機獣少女〉とMBデバイスの間には不可視の経路が形成されてて、双方向通信――一種の『テレパシー』が可能になる。実際に使うのは説明された時以来だけど。
（どうしたの？）
私も通信で返す。ちょっと緊張するけど、要は心で思えばいい。

（少々、アクシデントがあってな）

（え!?　大丈夫なの!?）

アクシデントと聞いて軽くパニックになる。ツバキは色々と勝手が判らないはずだから、何か問題を起こしたとか、事件に巻き込まれたとか、不安が一気に巻き起こる。

（なに、心配は不要だ。アクシデント自体は、すでに解決した）

（そうなの？　ならいいけど……）

〈カグツチ〉の声音（こわね）が落ち着いてるから、とりあえず焦るような状況じゃない事だけは読み取れた。

（うむ。ただ、別の問題が発生してな。私の現在地が判るか？）

（えっと……うん、判ると思う）

〈カグツチ〉との間に形成された経路（パス）を通じて、どこにいるのかも大まかにだけど判る。歩いていける距離だ。

（では、悪いが迎えに来てくれ。ツバキの分の着替えを持ってな）

（え……？）

着替え？

着替えが必要な状況って、どういう事？

（ねえ、本当に大丈夫なの!?　ツバキは無事なの!?）

（まあ、落ち着け。実はな――）

●
●
●

「――ツバキ！」

「あ、やみひめさん」

私が大急ぎで走って、息を切らして駆けつけたのに、ツバキはあっけらかんとした様子だった。

「すみません、お手間を取らせてしまって……あの、どうされたんですか？」

「……ううん。なんか、私だけ馬鹿みたいだなって、虚脱感に苛（さいな）まれてるだけ」

「はあ……」

私のリアクションに対して、ツバキは不思議そうな顔をしてる。ツバキがいつも通りの澄まし顔だったので、私は安心を通り越して、一気に脱力しちゃったんだけど、きっと気付いてないと思う。

『だから、心配は不要だと言ったであろう？』

時代がかった口調の機械音声（マシン・ヴォイス）の主――〈カグツチ〉が、どこか呆れたような態度で言った。今は待機状態の黒い勾玉（まがたま）の姿で、ネックレスみたいにツバキの首に下げられている。

ここまでの道中で〈カグツチ〉にされた説明を要約すると、〈カタストロ〉の端末みたいなのと戦闘になって、ツバキの服が破れてしまったから着替えが要る――というものだった。確かに、ツバキのシャツは一部が裂けてしまっている。この格好で歩けば、人目につくと思う。それこそ、お巡りさんにでも見られたら、事件だと思われるだろう。

「はい。慌ててたから、私の服だけど」

持ってきた着替えをツバキに渡す。日曜日に買ったツバキの服は何着かあるけど、前述の通り、焦ってたから気が回らなかった。

「ありがとうございます。あの、出来れば向こうを向いていてもらえると……」

「あ、うん」

女の子同士だから気にしなくていいと思うけど、自分だけ着替えるとなると、気になるかもしれない。

ツバキ達が待っていたのは、いわゆる廃ビルだった。立ち入り禁止の札が表に立っていて、子供達が遊び心で侵入するには勇気がいる雰囲気だった。だから人目はないし、関係者じゃない限り、入ってくる人もいないと思う。

「あの、やみひめさん……」

「どうしたの？」

ツバキの戸惑い気味の声に振り返る。何かあったのかと不思議に思ったけど、すぐに理由は知れた。

ツバキが袖（そで）を通した私の服の一部が、すごく窮屈そうだった――主に、胸が。

忘れてた。ツバキの小学五年生とは思えない、規格外な部分を。

あれ、なんでだろう……すごく敗北感がする。

「……なんか、ごめんね」

「……いえ、私の方こそ」

ツバキにしてみれば、コンプレックスなんだし、私の不手際を責めていいはずなのに、私の気持ちを察したのか、申し訳なさそうな顔をされてしまった。

うん、それはそれで微妙な気分。

乙女心って複雑だ。

「……えい」

「――〈？〉」

突然の私の行為に、ツバキが機能停止（フリーズ）したように固まった。
今、私の人差し指の先が、ツバキの胸に触れている。
想像以上の柔らかい感触。それでいて弾力があって、指を押し返そうとしている。触れた瞬間に擬音を付けるなら、『ふに』だと思う。
「……」
ツバキはまだ固まったまま。
私は何度か、玄関の呼び鈴（チャイム）を鳴らすみたいに、指でツバキの胸の弾力を確かめたりした。
あれ、なんでこんな事してるんだっけ？
でも……幸せな感触だ。
そんな事を繰り返していると――
「……やみひめさん？」
「――あ」
ツバキが初めて見る顔をしてる。すごく穏やかな笑顔だけど……すごく怖い。
「この行為には納得の出来る理由があるんですよね？」
「えっと……」
「それはもっともだと、怒るのは筋違いだったと、私が反省を通り越して、やみひめさんに畏敬の念を抱かずにはいられなくなるような――そんな理由が」
これはあれだ。私は多分、やっちゃいけない事をやっちゃったんだ。越えてはいけない一線を越えたとか、禁断の領域に踏み込んだみたいな。
「やみひめさん――言ってみてください」
よし。ここはアレしかない。どんな失敗も許してもらえる魔法の言葉を使うしか。

「……てへ♪」

自分で自分の頭を小突いて、舌をちょろっと出す。この時、可能な限り可愛い表情を作る事も忘れてはいけない。この可愛さ如何（いかん）によって、相手の心証が大きく変わる――らしい。
「……ふふ。やみひめさんは本当にお茶目な方ですね。そんなに愉快な対応をされてしまっては、私も相応の手段に打って出なければいけません」
私は激しく後悔した。藁（わら）にも縋（すが）る思いでやってみたけど、こんなので許してもらえるはずがないなんて、考えなくても判る事なのに。
「さあ、自分の犯した罪を数えてください？」

例の怖い笑顔でツバキが迫ってくる。
うん。今更、数えきれないよ……。

●　●　●

廃ビルを出て、ツバキと一緒に帰路に就く。ちらほら街灯が点き始めている、そんな時間帯になっていた。
「……うー。まだ、ジンジンする」
あれから、両方の頬を散々つねられた。ツバキの力は意外と強くて、的確に痛いポイントをつねってきた。
執拗に。
何度も、何度も。
「――あら？　何か言いたい事でも？」
「ううん！　何もないよ！？」
ツバキの笑顔がすごく怖くて、私の声は裏返ってしまった。
「そうですか。私はてっきり、罪を数え足りないのかと思ってしまいました」
「――――！？　全然！　もう充分だよ！」
ツバキ怖い。ツバキ怖い。ツバキ怖い……！
もう絶対にあんな事はしない。
というか、自分でも自分の行動の理由が説明出来ない。
ツバキが心配で気が動転して、無事だった事に安心しすぎて気が抜けて、思わぬタイミングで女としての自尊心が傷付いて……感情の振れ幅に頭がパンクしてしまったのかもしれない。
……だからって、ツバキのコンプレックスを的確に刺激する必要はなかったけど。

「――ふふ」

ふいに隣から、控えめな笑い声が聴こえた。
「ツバキ……？」
「あ――すみません、急に」
思い出し笑い、かな。ツバキのイメージになかったから、ちょっと意外。
「面白い事でも思い出したの？」

「いえ。ただ……昨夜から気まずい感じだったのに、いつの間にか元に戻っていたので」
「あ……」
そうだ。あんなに気まずくて、アサトに相談までしたのに、そんな事は忘れてしまっていた。
「……もしかして、そのためにあんな事を？」
「そうなんだ――って言いたいけど、違うよ。ただの怪我の功名」
ツバキの事が心配だったとか。予期せぬ精神的な敗北感とか。そういったものが偶然重なっただけ。
「そうですか。でも、少し安心しました」
「何が？」
「やみひめさんが、そんなに策士だったら、ちょっと嫌です」
「え、そうかな……？」
「そうですよ」
ツバキがすごく真剣な顔で言うから、私もそんな気がしてきた。単純かもしれないけど、ツバキがいいなら、いいかなって。
「そっか」
「はい」
そのまま和やかに会話は弾んだ。昨夜から続いていた気まずさは、もうない。
ツバキは今日も図書館で調べ物をして、帰りに〈カグツチ〉が〈カタストロ〉らしい反応を感知して、場所を調べるだけのつもりが、遭遇戦になってしまったらしい。幸いだったのは、〈カタストロ〉の『本体』じゃなくて『端末』だった事。自分から切り離した身体の一部で、いわゆる『分身』みたいなものらしい。だから、本調子じゃないツバキでも倒せたそうだ。
「……やみひめさん」
「うん？」
その説明を聞いてから、しばらく無言で歩いていると、ふいにツバキが口を開いた。
「あの、昨夜はすみませんでした」
「え……？」
まさか、ここで昨夜の事を蒸し返されるとは思わなかった。でも考えてみれば、根本的な解決は何もしてない訳だから、ちゃんと解決させておく必要があると思ったのかもしれない。
「私はやみひめさんに救われて、これからも助けてもらわないといけないのに、あんな言

い方をしてしまいました。勝手な言い分で気を悪くさせてしまい、本当にすみませんでした」

そう言って、ツバキは深々と頭を下げた。

「い、いいよ！　私は全然気にしてないし、ツバキの言った事の方が正しいと思うし」

「いいえ、ただの正論です。正論だけではどうしようもない事を、私は知っているはずなのに、それをやみひめさんに押し付けようとしました。だから、謝らせてください」

「ツバキ……」

「……」

ツバキは、世の中には割りきれない事があるのを知ってる。それでも割りきらなきゃいけない事も知ってる。だから、その板挟みに遭ってるんだ。

ツバキは大人だ。私なんかより、ずっと。

そんなツバキに、私はかけられる言葉なんて持ってない。

だから――

「――え？」

私はツバキの頭に手を載せて、優しく撫でた。アサトにされたみたいに。

「あの、やみひめさん……？」

ツバキが珍しく動揺してる。どう反応していいか判らないんだと思う。

「よしよし」

そのツバキの様子が可愛くて、私はそんな言葉を付け加えた。

「は、恥ずかしいんですが……」

恥ずかしさに耐えかねたのか、ツバキが微妙に視線を逸らす。頬も薄っすら赤い。

「あのね、私は戦いとは無縁の生活をしてきたから、ツバキの気持ちは判らないと思う」

「それは、仕方がない事です」

「うん。でもね、ツバキも同じで、戦いがないのが普通の私の気持ちは、判らないでしょ？」

「……はい」

「判らないのはお互いさま。だったら、判らない事は判らないって言っちゃおうよ。こうなんじゃないかって勝手に想像したり、判らないからってあきらめるんじゃなくて、『こう思ってるよ』って言い合おう？　私は、それがいいと思う」

判らないのが普通で、判ろうとするのにも限界がある。

だから――教えてもらう。

ほとんどアサトの受け売りだけど。

「私はツバキの気持ちが知りたい。理解したい」

だから――

「だから教えて――ツバキの気持ち」

完全に理解は出来なくても、理解する努力は無駄じゃないはず。

完全に同意は出来なくても、妥協点は探れるようになるかもしれない。

そうやって、お互いに納得が出来る答えを導き出すしかないと思う。

あとは相手が、それを受け入れてくれるかどうか。

踏み込まないでって言われるかもしれない。余計なお世話かもしれない。

でも、私は図々しいから、気にしない。

お節介なんて思わない。

それで嫌われても構わない。

「私も……」

ツバキが微妙に逸らしていた視線を私に戻す。

「私もやみひめさんの気持ち、知りたいです。理解したいです」

「うん。教えるよ」

「私も教えます。やみひめさんに――私の気持ち」

「うん……うん！」

嬉しい気持ちが溢れだして、止められなくて、私はツバキを抱きしめていた。ツバキはきっと、少し困った顔をしてると思う。でも、嫌がられるまでは、こうしていたい。

嫌われるのは嫌だけど。

嫌がられてるうちは大丈夫だよね。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第八話をお届け致します。

嫌よ嫌よも好きのうち。

なんというか、そういうお話です――違いますね、はい。

前回のサイドストーリーから一ヶ月半ぶりの『ゾイやみ』です。

やみ子とツバキが気まずくなって絆が強くなる――雨降って地固まる話です。当初の予定にはありませんでしたが、書いていたらこうなりました。さっさとストーリーを進めればいいものを、本当にこういう面倒くさい話が好きみたいです。面倒くさいの上等という猛者（もさ）の方は、今後もお付き合いください。

今回は短めにして、そろそろ謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。せっかく終わりが見えてきたのに、ちょっと最後まで書けるか怪しくなってまいりました。騙し騙し続けてきましたが、いよいよ年貢の納め時というか……まあ、まだどうなるか判りませんが。

嗚呼（ああ）、明日が見えない……。

２０１５／５／13　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る